棘

西巻未糸歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
棘

【Ｎコード】
Ｎ２７７６Ｌ

【作者名】
西巻未糸歩

【あらすじ】
心に棘がささったまま成長してしまった
あたしは毎晩死にかける
棘を抜く鍵は記憶の中で共に成長した彼なのか…

大人のせつないプラトニック短編小説

雨の海のあの日から
棘がささってしまって抜けない…

もう十数年も

ばからしくなったり
アホらしくなったり
しまいには腹立たしくなって

最終的には苦しくなる

この小さな棘にはどうやら猛毒が仕込まれていたらしい

毒を食らわないように
気をつけて生きていたはずなのに…

だいたいこんなバカなことがあるだろうか
人からみたらコレッポッチの小さな棘に

いい大人がのたうち回って涙するのだから。

それは実に純粋すぎて

いろいろな意味で曇ってしまった今の私では
どうすることもできないくらいの小さな棘なのだ。
抜くことも無視することもできない

刺さりはじめの頃のどうしようもない
四六時中の痛みはなくなった…
いつからか見ないフリはできるようになって
でも、少し飛び出している先端が気になって
触れたが最後、心臓を打ち抜かれるが如く
痛みで全身が麻痺するほどだ。

それは、はじめの頃の痛みなんか比にならないくらいの激痛だ

薄れ行く意識の中で
あの顔が靄に霞んで消えていく頃
あたしは寝床で意識を失い眠りにつく

記憶というのはおかしなもので
たしかに子どもであったはずのその姿は

あたしの成長と共に成長しているのだ。
一度も見たことがないはずの成長した彼の姿に、
最近じゃ毎晩殺されかけてるという訳だ。

そんなあたしだって恋をしないわけではない。
どちらかというと、片思いマニアのプラトニックちゃんとは
まるっきり反対の人生を歩んでいる。
まぁ自慢にはならないけど
長年連れ添った彼氏だっている。

それに、満足して生活しているはずなんだけど…

朝の慌ただしい時間に
こんな物思いに更けるもんだから
あたしは大抵遅刻する。
電車も仕事も友達との待ち合わせも彼との約束も…

おかげさまで周りの人々に恵まれ
それでもなんとか生きていけている。

それにしても今朝はノロマすぎた。
遅刻常習犯の１５分進めた時計では
とっくに朝礼が終わっていた。

せっかくだから寄り道をしていこう。
これだからである…

駅前に新しく出来た喫茶店は
この辺では珍しい喫茶店というよりカフェといったかんじの店だが
一歩店に入るといかにもなマスターがコーヒーの豆を轢いている。
このミスマッチがなんとも”この辺”というかんじで
あたしは開店以来、実は3日と空けず通っている

おはよぉございまぁす。いつものでよろしいですかぁ？

バイトの若いオンナノコが語尾をのばして黄色い声をあげる。

あっはい…お願いします

となぜか敬語で返してしまう。

若さにはかなわない…

そんなことを思いながら

自分の腕のプニプニを触ってみる
年は取りたくないものだ。
マスターのいれてくれたコーヒーはいつもよりちょっと濃くて
あたしの浮腫んだ体をみて気を使ってくれたのかしら
と、照れ隠しに砂糖をいれる。

あたしはきまって窓際の席に座わる
なんでかって
海が見えるから…

ちょうど駅と酒屋の境から少し遠くに海が見える
この店の、この窓からしかみえない
あの海…

ここから見える小さく切り取られた海が
あの雨の日の記憶にかぎりなく近いのだ。
だから、バイトの金切声もマスターの無愛想も全部許せる。
またチクッとした。

解毒薬を飲むかのようにコーヒーを飲み干し
海に目をやる…

…

…？？？？

海へ向かう、駅と酒屋の間に
記憶の中でしか会ったことのない
成長した背中を見つけた

！！＃＊$！！！？

声にならない悲鳴をあげたのは
人生でこれが初めてだったかもしれない。

お釣はいらないです。

慌てて店を飛び出す。

そういえばこんなセリフを言ったのも
はじめてだ。

初めてみるはずの見覚えのある後ろ姿を
必死で追いかけてる途中

レジにいたバイトのオンナノコの
初めてみる慌てた顔や
普段は優雅な振る舞いのマスターが
初めて機敏に振り返った姿

それに

なんでも二の次のあたしが
はじめて本気をだして駆けていることに気付く。

チクチクチク

距離が縮まるごとに
棘が深くささっていく
あたしの心臓はいつしか腫れ上がって
身体中に毒がまわってきている。

マスターのコーヒーじゃもうどうにもできないくらいに。

なんて声をかけようなんて
そんな余裕はとうにない。

とにかくこの棘が
どうしたら抜けるのか知りたかった。

いや、知っていたのだ。

彼にしか抜けない。

もうほんの僅か

手の届く距離

肩をたたくでもなく
声を掛けるでもなく

彼をダッシュで追い抜く

目指すは、あの海

彼を追い抜いてから

しばらく走り続けて

波打ち際までたどりついた

断崖絶壁のような
地平線のその先には
きっとまだまだ海が続くだけなんだ。

今日は本当にいい天気で
雨のあの日とはまるで違った世界が広がっている

きっと、本当は初めから知っていたんだ

彼じゃないこと。

彼ではないことを。

深く吸い込んで
小さなため息をつく。

チクチクチク

今まで聞こえなかった時計の針の音が聞こえだす。
もういかなきゃ
小さく呟いて
駅に向かう
酒屋と駅の間にたどりつくと
喫茶店の特等席には学校をふけた女子高生が座っている。
彼女の目にあの海はどう映っているのだろう
もしかしたら
見えているのかな
さめざめと降る雨の景色に

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2776l/

棘

2010年10月10日01時46分発行